

# 発掘された小松城と小松町

小松城と小松町は、寛永十六年（一六三九）に前田利常が小松城を隠居城

と定めたことにより実質的な整備が進められた。整備の基本は、河川、水路の利用にあり、城は梯川の流れを取り込み、武家地は水路で囲んだ。町人地は武家地の外に配し、中央に北国街道を通して

城内と小松町の様相は、近年行われた小松高校改築や大川町の県道拡幅工事にもなう発掘調査によって一端が明らかになった。

小松高校は小松城の本丸と二ノ丸に位置を占めており、発掘調査によって遺構が確認された。本丸では東南隅の石垣が発見さ

れた。また、二ノ丸では四段積みみの石垣と結桶を側板とする十七世紀前半の

井戸群が発掘された。井戸群の場所は、天和三年（一六八三）の『小松御城中



小松城本丸石垣の発掘調査風景(小松高校旧第一体育館西側。平成11年撮影)



小松城二ノ丸の石垣(小松高校旧第一体育館西側。平成11年撮影)

「絵図」に「御作事小屋」と記されている。二ノ丸の出土遺物は大半が十七世



発掘された小松の町並み(大川遺跡。平成17年撮影)

紀前半以降のものであるが、十五・十六世紀の土器や石製品も含まれており、築城以前には集落として土地利用がなされていたことがわかった。

大川遺跡では、新町堀に架けられた「小橋」の橋台石垣、北国街道、そしてそれに面した町屋が発掘された。大川町は小松町の北東入口にあたり、近世には泥町と呼ばれた。

北国街道は、十七世紀前半以降数度にわたって路盤のかさ上げが行われており、路面には玉砂利(たまじり)が敷かれていた。「小橋」の橋台石垣は、凝灰岩(ぎょうかいがん)の切石を五段に積んだもので、江戸時代末期の築造と見られる。小松町の玄關口にふさわしい堅固な橋台である。町屋は、間口が狭く、奥行の長い敷地で、櫛の歯のように連なっている。



北国街道と新町堀の橋台石垣(大川遺跡。平成18年撮影)

出土遺物には、九谷のほか、肥前(ひぜん)、瀬戸、美濃(みの)といった各地の焼物、漆器(しつぎ)、木製品などがあり、多様な資財を所有していたことがわかった。(三浦純夫)

(写真は石川県埋蔵文化財センター提供)